

間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成する外国語活動の工夫 —郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を通して—

熊野町立熊野第四小学校 藤田 有記

研究の要約

本研究は、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を通して、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成する外国語活動の工夫について考察しようとしたものである。文献研究から、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成するには、コミュニケーション能力を支え、意欲を喚起する身近な素材を取り扱い、英語を使って世界につながっていくと感じられる体験を仕組むことが必要であることが分かった。そこで、インフォメーション・ギャップが起こる異なる文化をもつ人々との交流を通して、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動に三つの心理的欲求（有能性・関係性・自律性）を満たす手立てを取り入れた授業構成を行い、実施した。その結果、郷土の伝統や文化の素材を生かし、コミュニケーション活動を仕組めば、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながることが分かった。

キーワード：郷土の伝統や文化

I 研究の目的

小学校学習指導要領（平成20年）外国語活動の目標には、外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることが示されている。また、グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言（平成26年9月、以下「五つの提言」とする。）において、小学校・中学校・高等学校を通じて、授業で発音・語彙・文法等の間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することと、英語を用いてコミュニケーションを図る体験が必要であることが述べられている。

平成25年度「基礎・基本」定着状況調査の生活と学習に関する調査において、「外国人と積極的にコミュニケーションを図りたいです。」という項目への本県生徒（中学校第2学年）の肯定的回答は、51.4%であり、約半数の生徒が積極的にコミュニケーションを図ることに躊躇していることが分かる。また、所属校の児童（第5学年）においても同様の傾向がみられ、その原因の一つとして「外国語を話す機会がない」「自信がない」等の理由を挙げている。

廣森友人（2014）は、活動の素材を身近なものにすることで、児童の意欲が喚起されるよさについて述べている。また、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）においても、「我が国や郷土の伝統や文化について英語で伝えるという視点

も含める。」と新しく取り扱う内容について示され、郷土の伝統や文化の内容を取り扱うことがこれから英語教育で必要な視点であることが分かる。

そこで、外国語活動において、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を取り入れる。具体的には、異なる文化をもつ人々と実際にコミュニケーションを図る場を設定し、自分たちの身近な郷土の伝統や文化のことを素材にした交流体験を行う。また、課題である「自信がない」「機会がない」ということを解決するため、三つの心理的欲求（有能性・関係性・自律性）を満たす工夫を取り入れる。この活動を通して、自分の郷土のことを伝えたい、相手の郷土のことも知りたいという意欲が生まれ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考えられる。

郷土の伝統や文化の素材を使って、実際のコミュニケーション活動を外国語活動の授業に取り入れると積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考えられるため、汎用性や実用性も高いと考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成するには

(1) 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度とは

「五つの提言」（平成26年9月）において、「学習の過程では、発音・表現・文法等があやふやになったり、間違ったりするのは当然のことである。そうした失敗を恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成するためにも、授業において実際に英語を使う言語活動を一層重視する必要がある。」¹⁾と示されている。

また、萬谷隆一（2013）は、小学校外国語活動で育てる「情意的素地」とは、なんとかわかり、伝えようとする態度・間違いを恐れない態度・ことばや文化の違いや共通性への興味などを含み、それを外国語教育の最初の段階で身に付けることは大きな意義があると述べている。

さらに、中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年）において、積極的に会話を継続し、発展させていく指導として、いろいろな工夫をして話を続けることが示されている。

これらのことから、本研究における間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度とは、ことばや文化の違いや共通性への興味をもち、いろいろな工夫をして話を続け、何とかわかり、伝えようとする態度であるとまとめる。そこで、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする具体的な姿の例を中学校学習指導要領解説（平成20年）外国語編、卯城祐司・蛭田勲（2009）等の文献を基に表1にまとめた。

表1 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする具体的な姿の例⁽¹⁾

いろいろな工夫をして話を続け、何とかわかり、伝えようとする態度	
言語	非言語
・繰り返す。 ・単語で言う ・言い換える。 ・ALT や HRT に尋ねる。	・聞き返す。 ・造語を使う。 ・ジェスチャーを用いる。 ・辞書を使う。 ・絵に描く。

(2) 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成するには

廣森（2014）は、活動の素材を身近なものにすることで、児童の意欲が喚起され、また、より良いコミュニケーション能力を支える意欲を喚起させるには、活動を身近で知的好奇心を満たす活動にすることが必要であると述べている。

また、白井恭弘（2012）は、小学校では、まず外国語や国際的なものを学ぼうとする意欲、いわゆる国際的志向性を高める動機づけの面を目標にするべきで、文化にとどまらず、英語を使うことで世界につ

ながっていくということを体験させていくべきと体験の重要性を述べている。

これらのことから、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成するには、コミュニケーション能力を支える身近な素材を取り扱うこと、英語を使うことで世界につながっていくということを体験させていくことが重要であると捉える。

2郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動について

(1) 郷土の伝統や文化の素材を取り扱う意義とは

学校教育法第21条3では、伝統と文化を尊重し、それらをはぐぐんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことが示されている。

また、小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成20年、以下「解説」とする。）では、「外国語活動では、外国の文化のみならず我が国の文化を含めたさまざまな国や地域の生活、習慣、行事などを積極的に取り上げていくことが期待される。」²⁾と示されている。

さらに、金森強（2011）は、扱う素材について、住んでいる地域など、子どもたちに身近なもので、伝えたい情報を活用することにより、必然性を感じながら取り組むことができ、ALTと豊かなコミュニケーションも生まれてくるはずであると述べている。

これらのことにより、郷土の伝統や文化の素材を取り扱う意義とは、身近な地域の素材で伝えたいという必然性を感じさせながら児童にコミュニケーション活動を取り組ませることにより、豊かなコミュニケーションにつながることと考える。

(2) 郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動とは

「解説」では、言語や文化について、ネイティブ・スピーカー（ALTや留学生など）や地域に住む外国人など、異なる文化をもつ人々との交流を通して、体験的に文化等の理解を深めることが大切になると示されている。

また、卯城・蛭田（2009）は、「外国語活動の目標では、特に、外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成において、『伝える必然性』と『自分の言いたいことが言える表現』に触れることが動機づけの面からみてもよいだろう。」³⁾と述べている。

さらに、金森（2012）は、語彙やフレーズに慣れて

きたら、その英語表現を用いたコミュニケーション活動、ショウ・アンド・テル (show and tell) を含む自己表現活動へと広げるなど、インフォメーション・ギャップを作り、新しい情報のやりとりが起こる活動を考えることが大切であると述べている。

これらのことにより、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動とは、インフォメーション・ギャップが起こる異なる文化をもつ人の交流を通して、伝える必然性のある郷土の伝統や文化の素材を取り扱った体験的なコミュニケーション活動と捉える。

(3) 外国語活動における三つの心理的欲求について

高島英幸 (2007) は、教師の役割として学習効果を高めるために、動機づけをすると共に興味を持続させる活動になるように工夫しなくていいけないと述べている。本研究では、廣森 (2006) が示した動機づけのプロセスである三つの心理的欲求を援用し、単元を通して、郷土の伝統や文化の素材を使って意欲的に取り組めるようにする。

三つの心理的欲求（有能性・関係性・自律性）がどのような欲求なのかについて、Deci & Ryan (1985) らの考えを基に表 2 にまとめた。

表 2 興味を持続させるための外国語活動における三つの心理的欲求⁽²⁾

有能性	関係性	自律性
「できた」「わかった」という自信をもちたいという欲求	コミュニケーション活動を通して、他者と友好的に学びたいという欲求	伝えたいことを自分で決めて取り組みたいという欲求

表 2 から、本研究においての有能性の欲求は、自信をもちたい、関係性の欲求は、他者と友好的に学びたい、自律性の欲求は、自分で決めて取り組みたいということであると捉える。

これらの三つの心理的欲求を満たすと児童が課題に対して興味を持続させながら、積極的に取り組むと考えた。

また、本研究の構想図を図 1 に示す。

では、これらの欲求を満たすには、どのような工夫があるのだろうか。

(4) 郷土の伝統や文化の素材を生かす三つの心理的欲求を満たす工夫について

郷土の伝統や文化の素材を生かす、三つの心理的欲求を満たす工夫について、金森 (2012) らの考えを参考にして、表 3 にまとめた。

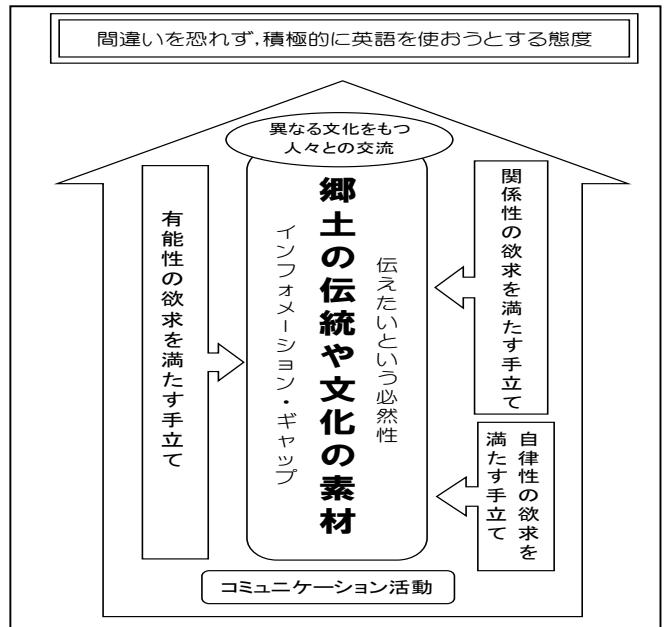


図 1 本研究の構想図

表 3 郷土の伝統や文化の素材を生かす三つの心理的欲求を満たす具体的な手立て⁽³⁾

具体的な手立て	
有能性	<ul style="list-style-type: none"> 「できた」「わかった」と自信がもてるよう、郷土の伝統や文化の素材を使ったチャンツやゲーム等で慣れ親しませる。 郷土の伝統や文化の素材を使ったショウ・アンド・テルで「できた」「わかった」と感じられる体験をさせる。 振り返りカードと授業中の肯定的な声かけにより、肯定的なフィードバックを与える。 郷土の伝統や文化の素材を使ったショウ・アンド・テルの練習で、児童同士が相互評価をする機会を与える。
関係性	<ul style="list-style-type: none"> 郷土の伝統や文化の素材を使う活動で、他者（教師・児童・留学生）との相互作用の機会を数多く与える。 外国人の人・文化にふれる体験をさせる（留学生との交流会）。
自律性	<ul style="list-style-type: none"> 伝えたい郷土の伝統や文化の素材を選んだり、伝えたい表現を自分で決めさせたりする。

以上のことから、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動に三つの心理的欲求を満たす手立てを取り入れると、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することにつながると考える。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

郷土の伝統や文化の素材を生かし、三つの心理的欲求が満たされるコミュニケーション活動を仕組めば、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながるであろう。

“Hi, friends! 1” Lesson 7 単元計画

時	目標	主な活動	評価			三つの欲求			
			コ	慣	気	評価規準 (評価の方法)	有能性	関係性	自律性
1	本単元の見通しをもち、熊野町のよさに気付く。	【L】 フラッシュカードを用いてある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現する言い方を聞く。 【C】 チャンツを言う。 ・デモンストレーション聞く。 ・熊野町の伝えたいことを自分で決める。		○		地域の文化のよさに気付いている。 (振り返りカード分析)	○		◎
2	ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。	【C】 チャンツを言う。 【A】 熊野カルタ取りをする。 ・グループで協力しながら、辞書なども使い、紹介したい文章を自分で考える。 ・辞書の使い方を知る。	○			ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しみ、聞いたり、言ったりしている。 (振り返りカード点検)	○		◎
3	熊野町を紹介するための表現に慣れ親しむ。	【C】 チャンツを言う。 【A】 シークレット・カードゲームをする。 【A】 熊野町スリーヒントクイズをする。 ・グループで発表練習をする。 (ALT, HRT, JLT にアドバイスや評価をもらう。) ・英語での褒め言葉を知る。	○			地域を紹介するための表現に慣れ親しみ、聞いたり、言ったりしている。 (振り返りカード点検)	○		
4	熊野町を紹介するための表現に慣れ親しむ。	【C】 チャンツを言う。 【A】 シークレット・カードゲームをする。 【A】 背中の絵は何クイズをする。 ・グループで発表練習する。 (友達と相互評価する)	○			地域を紹介するための表現に慣れ親しみ、聞いたり、言ったりしている。 (振り返りカード点検)	○	○	
5	日本と外国の言語や文化の違いに気付き、自分の伝えたいことを何とかして英語で伝えたり、聞いたりする。	【C】 チャンツを言う。 【A】 背中の絵は何クイズをする。 【A】 ショウ・アンド・テルで留学生に熊野のことを紹介したり、留学生の国のこと聞いたりする(質問し合う)。	○	○		自分の伝えたいことを何とかして英語で伝えたり、聞いたりする。 (行動観察) (振り返りカード点検、分析) 日本と外国の言語や文化の違い・共通点に気付いてい (振り返りカード分析)	○	○	

【L】 : Let's Listen 【C】 : Let's Chant 【A】 : Activity

コ : コミュニケーションへの関心・意欲・態度 慣 : 外国語への慣れ親しみ

気 : 言語や文化に関する気付き

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表4に示す。

表4 検証の視点と方法

視点	方法
郷土の伝統や文化の素材を生かし、三つの心理的欲求を満たすことができたか。	・質問紙による事前・事後アンケートの分析、考察 ・振り返りカードの分析、考察
郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を通して、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながったか。	・行動観察 ・質問紙による事前・事後アンケートの分析、考察 ・振り返りカードの分析、考察

○ 期 間 平成26年12月2日～平成26年12月15日

○ 対 象 所属校第5学年1組(35人)

所属校第5学年2組(34人)

○ 単元名 “Hi, friends! 1” Lesson7

“What’s this?”

— 伝えたいな 私たちの町熊野町 —

○ 目 標

- ・友達や先生や留学生に、簡単な英語を使って積極的に自分の伝えたいことを伝えたり、質問に答えたりしようとする。
- ・ある物が何かと尋ねたり答えたりする表現や地域を紹介するための表現に慣れ親しむ。
- ・日本と外国の言語や文化の違いに気付き、地域の文化のよさに気付く。

IV 研究授業について

表5 “Hi, friends! 1” Lesson 7 評価

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
自分の伝えたいことを何とかして英語で伝えたり、聞いたりしている。	ある物が何かと尋ねる表現や地域を紹介するための表現に慣れ親しみ、聞いたり、言つたりしている。	日本と外国の言語や文化の違いに気付いている。地域の文化のよさに気付いている。

V 研究授業の分析と考察

1 郷土の伝統や文化の素材を生かし、三つの心理的欲求を満たすことができたか

三つの心理的欲求を満たすことができたかどうかを検証するために、事前・事後アンケート及び振り返りカードの分析、考察を行った。

(1) 事前・事後アンケートについて

図2は、三つの心理的欲求の尺度得点の事前・事後のアンケートの結果を表したものである。

t検定を行ったところ、有意な差 ($p < 0.001$) が三つの項目全てにおいて見られた。

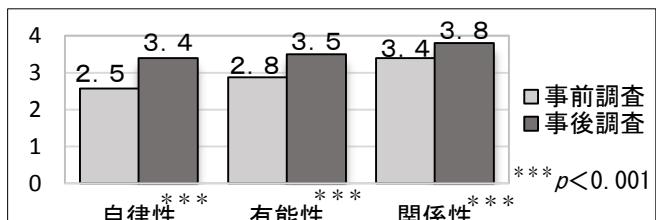


図2 三つの心理的欲求について

(2) 振り返りカードの分析と考察

第1時から第5時の授業後の振り返りカードにおける、自律性・有能性・関係性の三つの心理的欲求の変化について述べる。

ア 自律性の欲求を満たすことができたか

図3は、各時間の振り返りカードにおける自律性の欲求の割合を示したものである。

自律性については、第1時及び第2時に重点を置いて取り組んだ。その結果、ほとんどの児童が「とてもそう思う」「そう思う」(以下、肯定的とする。)

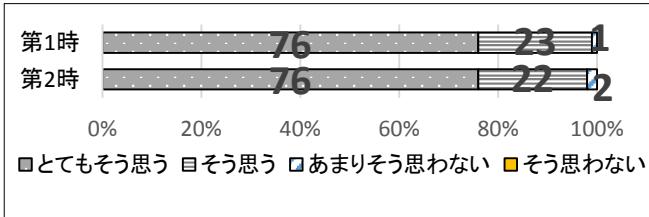


図3 自律性の欲求について

と回答していた。質問の具体は、第1時が、「自分で決められることがあった」、第2時が、「伝えたい文章を考えた」「自分で決められることがあった」の二つであった。ほとんどの児童が肯定的な回答をしていたが、2人の児童が否定的な回答をした。この2人の児童については、時間内に決定することができなかったため、休憩時間を使って自己決定できるよう支援を行った。課題としては、授業時間内に早く気付き、決定できる声かけが必要であった。

A児は、「自分の伝えたいことが選択できたので、意欲的に取り組むことができる。」と授業中、発言しており、第4時では、「熊野町の良いところをもっと見つけたくなった。」と記述するなど、単元最後まで、大変意欲的に取り組んでいた。

また、5人の児童が「自分で決められることが楽しかった」「自分で決められて、よかった」と記述しており、自分で伝えたいことを決めるということは、児童の意欲を喚起するのに有効であったといえる。

このように、伝えたい郷土の伝統や文化の素材や伝えたい内容を自分で決めることにより、自律性の欲求は、満たされたと考える。

イ 有能性の欲求を満たすことができたか

図4は、各時間の振り返りカードにおける有能性の欲求の割合を示したものである。

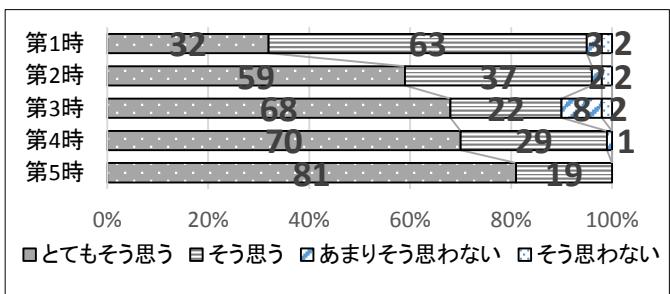


図4 有能性の欲求について

有能性については、第3時及び第4時に重点を置いて取り組んだ。徐々に肯定的な回答が増え、第5時には全員が肯定的な回答をしている。

5月に行ったアンケートにおいて外国語活動が好きではないと回答していたB児は、第1時においても否定的な回答であった。しかし、第2時から第5時は全て肯定的な回答をしている。これは、教師の肯定的な声かけと振り返りカードの肯定的なフィードバック、第4時の児童同士の相互評価、第5時の伝えたいことが伝わったことが大きな要因だと考える。第2時の感想には、「英語を話すのは難しいと思っていたけど、だんだん分かってきた」とあり、

これは、チャンツやゲームなどの慣れ親しませる活動が有効であったと考える。第5時では、「楽しかった。うまく伝わった」と英語を使うことに自信がついてきたことが分かる。

また、事後アンケートでは、「熊野のことが伝わったから、とても楽しかった」「熊野の良さを英語で言えた」などの記述が多くあり、「できた」「わかった」という自信をもたせるために郷土の伝統や文化の素材を使った手立てが有能性の欲求を満たすことにおいて有効であったことがわかる。

これらの「できた」「わかった」という自信をもたせることができたことで、有能性の欲求は満たされたと考える。

ウ 関係性の欲求を満たすことができたか

図5は、各時間の振り返りカードにおける関係性の欲求の割合を示したものである。

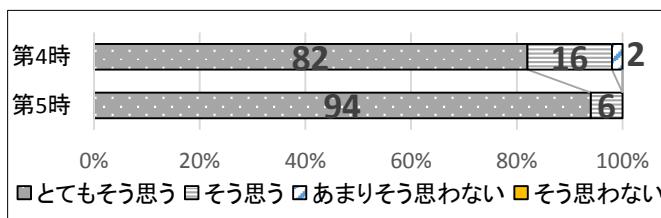


図5 関係性の欲求について

関係性については、第4・5時に重点を置いて取り組んだ。第4時に肯定的な回答をした児童の割合は、98%で、第5時には全員が肯定的な回答をしている。第4時は、互いにアドバイスをしたり、良いところを見付けたりして、相互評価をし、また第5時は、留学生と互いの郷土の伝統や文化をショウ・アンド・テルの発表で友好な関係がもてるようにした。

第4時は、2人の児童があまり友達と協力できなかつたと答えたが、第5時には、友達や留学生と楽しく交流でき、肯定的な回答している。

授業後、「みんなからアドバイスをもらえてよかったです」「熊野のことをジェスチャーなど使って伝えて、外国人と触れ合えて楽しかった」などの記述から、友達や留学生との関係性の欲求を満たすのに有効であったと捉える。

これらのことにより、他者との相互作用の機会を多くもったり、留学生と互いの文化に触れる体験をしたりすることにより、関係性の欲求は満たされたと考える。

(1) (2)のことから、郷土の伝統や文化の素材を生かし、三つの心理的欲求を満たすことができたと考える。

2 郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を通して、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながったか

(1) 事前・事後アンケートから

ア アンケートの分析・考察

間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながったかを検証するため、事前・事後のアンケートを行い、結果を図6、図7、図8に示した。t検定を行ったところ、すべてに有意な差($p < 0.001$)が見られた。

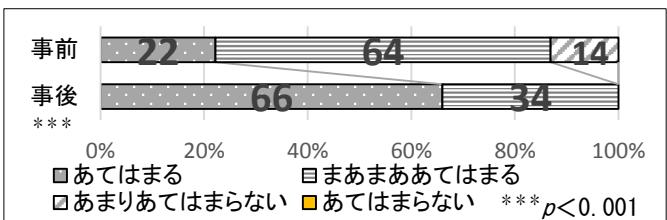


図6 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとしている

図6において、肯定的な回答をした児童の割合は、事前は86%であったが、事後は100%になった。事前に否定的な回答をした児童も、自分の伝えたい思いをもち、自信をつけることにより、自分の郷土のことを相手に積極的に伝えようという姿が見られた。

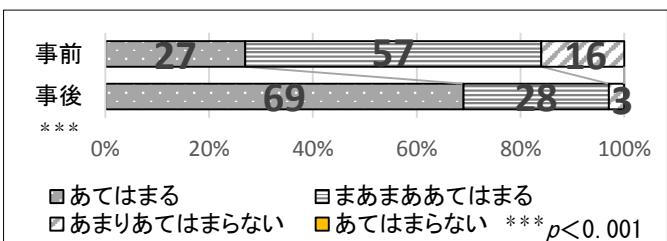


図7 聞き返したり、言い換えたり、単語で言ったりして何とかして伝えようとしている（言語）

図7において、肯定的な回答をした児童の割合は、事前は84%で、事後は97%になっている。

C君は、「筆は、どう使うのか」という留学生からの質問に対して、「paper」「black ink」「brush」と知っている単語を並べて、説明していた。

否定的な回答をした2人は、ジェスチャーなどの非言語の方法を使うことに肯定的な回答をしていた。言語で伝わらなかったので、ジェスチャーなどの非言語で、留学生に伝えたことがわかる。

図8において、肯定的な回答をした児童は、事前は63%で、事後は95%になっている。行動観察において、分からぬことがあつたら、非言語の方法を使い、何とか伝えようとする姿が多く見られた。

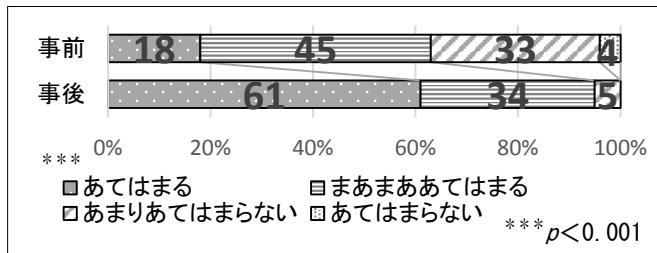


図8 ジェスチャーで表現したり、辞書で調べたり、絵にかいたりして何とか伝えようとしている（非言語）

自信がなく有能性の回答が低かったD児は、「筆のじくは何でできているか」という留学生からの質問に対して「竹」を辞書で調べ、「bamboo」と分かり、答えることができていた。事後アンケートでは、「熊野のことを伝えることができてうれしかった」と記述し、伝わったことに自信がもて、有能性の回答が「あてはまる」になった。

「あまりあてはまらない」と回答をした児童は、単語で言うなどの言語の方法を使うところに肯定的な回答をしていた。留学生との交流では、ジェスチャーなどの非言語ではなく、英語を使って何とかして伝えようとする姿が、行動観察において見られた。

図9は、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする具体的な姿を児童の事後アンケート結果によりまとめたものである。

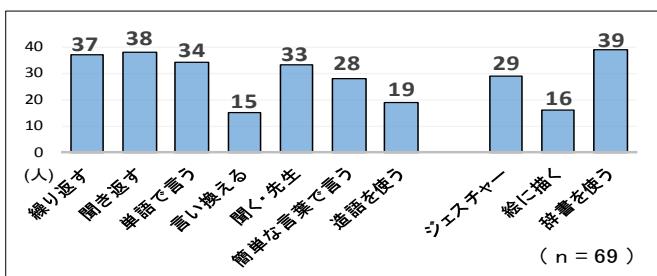


図9 間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする具体的な姿（児童の事後アンケート）

「辞書を使う」や「聞き返す」「繰り返す」が児童からは、多く挙げられていた。行動観察においても児童は色々な方法を使って、工夫して話を続ける姿が見られた。留学生からの質問受け、聞き返したり、伝えたい言葉を辞書で調べ、何とかして英語で答えたりしたことが分かる。

E児は、作曲家の「坊田かづま」の曲が12時に流れることを伝えるため、紙に時計を描いて12時を示し、「チャイム」「music」「make music」と言い換えたり、単語を並べたり、聞くというジェスチャーを使ったりといろいろな工夫をして話し続け、何とかして

積極的に英語で伝えようとしていた。

これらのことにより、児童が意欲的に取り組み、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動が、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとすることにつながったと捉える。

イ 事後アンケートの記述の分析・考察

「これまでの教材『Hi, friends!』の授業と自分たちの郷土のことを扱った授業と比べてどのような感想をもったか」の事後アンケートでは、74%の児童が「楽しかった」、14%の児童が「英語を学べた、良かった」、8%の児童が「うれしかった、面白かった」と答えており、単元を通して、楽しく意欲的に取り組んだことがわかる。

また、「なぜそのような感想をもったか」の事後アンケートの結果を図10に示した。

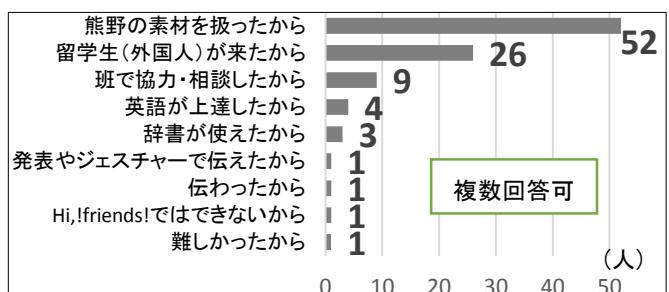


図10 なぜそのような感想をもったかの理由

積極的に外国人と話してみたいとあまり思っていないF児は、「私達の郷土、自分たちの住んでいるところだから話しやすかった」と郷土の伝統や文化の素材を扱うことは自分たちの身近なことだから、話しやすかったと記述していた。

一方で、「難しかった」という児童の回答がある。「留学生からの質問に答えるのが難しかった」という理由からであった。しかし、「留学生が何回も言ってくれてちょっと分かった」と難しかったが、分かったと肯定的に捉えていた。

以上のことにより、郷土の伝統や文化の素材を扱うことは、児童が意欲的に取り組み、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとすることにつながったと捉える。

(2) 振り返りカードの分析と考察

図11は、振り返りカードの第5時における「留学生と何とかして英語で交流した」児童の割合を示したものである。

図11において、「とてもそう思う」が84%、そう思うが16%と全員が肯定的な回答をしている。何とかして英語で交流できたのは、児童が自ら伝え

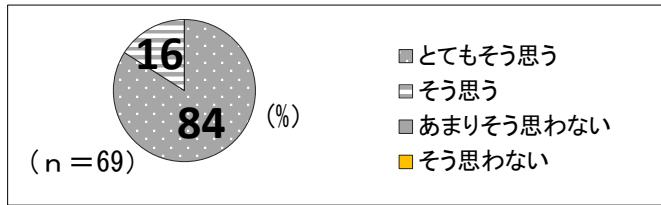


図11 留学生と何とかして英語で交流した

たい郷土の伝統や文化のことを自分で選び、伝えたいという必然性をもち、取り組んだためであると考える。

第1時から第5時まで、振り返りカードには感想も書かせた。

第1時では、「熊野にはたくさんよさがある」「有名なものがたくさんある」という気付きが多かった。

また、9人の児童が伝えたいことを選択する際に、「郷土のよさを感じることができた」と記述しており、自分たちの郷土について、愛着を感じるきっかけとなったことが分かった。

第2時から第4時にかけて、「留学生に熊野の良さを何とかして英語で伝えたい」という質的に高まった記述も見られた。また、学習の途中に、「熊野の良さをもっと見つけたくなった」と自分の郷土の伝統や文化の良さをより意識し始めた児童もいた。

第5時の記述には、他の児童からも「熊野のことを知ってもらってうれしかった」という記述が見られた。また、「外国の良いところを知ることができた」「タイのダンスをしてみたい」「フィリピンのデザートを食べてみたい」など留学生の郷土の伝統や文化を知ることは興味深かったということも記述されていた。

第3時まで有能性の回答が低かったD児は、第5時では「熊野のことをいろいろと知ってほしかった。熊野筆のことをしっかりと伝えられた」と全ての質問項目を肯定的に捉えることができていた。

これらのことから、郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動を通して、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

○ 本研究において、郷土の伝統や文化の素材を生かし、三つの心理的欲求が満たされるコミュニケーション活動を仕組めば、間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成につながったこ

とが分かった。

- 郷土の伝統や文化の素材を生かしたコミュニケーション活動に三つの心理的欲求を満たす手立てを取り入れると、有能性・関係性・自律性の欲求が満たされ、興味が持続することにつながることが分かった。

2 今後の課題

- 自律性の欲求を満たすための児童の自己決定に時間がかかった。児童の伝えたい表現を尊重しながら、時間配分に配慮する必要がある。
- 郷土の伝統や文化の素材を扱った授業を他の単元や他学年においても仕組めるよう研究を継続する必要がある。

【注】

- (1) 中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年）、高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編（平成22年）、卯城祐司・蛭田勲（2009）：『小学校教育課程講座 外国語活動』、大城賢（2014）：『英語教育 Vol. 66-4』を参考にして稿者が作成した。
- (2) ダニエル・ピンク著、大前研一訳（2010）：『モチベーション 3.0』講談社 p. 109、廣森友人（2014）：『英語教育 1月号』大修館書店 p. 48、廣森友人（2006）：『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版 pp. 6－7、加藤澄恵（2012）「学習活動が英語学習者の内発的動機に与える影響の検証」p. 10 :『千葉大学言語教育センター』第6号を参考にして稿者が作成した。
- (3) 金森強（2012）『小学校外国語活動の進め方』成美堂 p. 201、J. M. ケラー著、鈴木克明監訳（2010）：『学習意欲をデザインする』北大路書房 p. 171、高島英幸（2007）：『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店 p. 41、廣森友人（2006）：『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版 p. 114、岡秀夫、金森強（2012）『小学校外国語活動の進め方』成美堂 p. 95、高島英幸（2014）：『児童が創る 課題解決型外国語活動と英語教育の実践』高陵社書店 p. 18を参考にして稿者が作成した。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成26年）：「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言（平成26年9月）『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告』p. 7
- 2) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版社 p. 12
- 3) 卯城祐司・蛭田勲（2009）：『小学校教育課程講座 外国語活動』p. 88